

## 取組：小中高連携によるCAN-DOリストに基づく4技能の指導法と多面的な評価の研究

### 当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

- ・パフォーマンステスト実施状況や「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の達成状況の把握の割合も本県は全国平均より低い状況にあり、生徒のPDCAサイクルでの学習サイクルが構築されていないことも要因と考えられる。
- ・小中高連携の実施状況は、全国から比べ低い状況にある。連携に取り組んでいる中学校が多い都道府県・指定都市ほど、生徒の言語活動の実施割合やCEFR A1以上取得相当の生徒の割合などが高い結果となっている。小学校からの言語活動の積み重ねが、中・高等学校の英語力向上につながっていることから、「学びの接続」のために、小中高連携の拡充を図ることが必要である。

### Plan

#### ■取組計画

- ・事例の共有により、CAN-DOリストを活用した評価と指導の一体化を推進させる。
- ・「学びの接続」を意識した授業改善を推進する。

#### ■体制

- ①本県事業「小中英語パートナーシップ事業」の拠点校と「自律した英語学習者育成プロジェクト事業」の指定校において、連携した研究を行う。
- ②本県事業を関連付けることで、研究・取組の普及を図る。
  - ・「小中英語パートナーシップ事業」→いわき地区の拠点校を研修協力校
  - ・「自律した英語学習者育成プロジェクト事業」→いわき地区の指定校を研修協力校
  - ・「英語担当教員ネクストステージ事業」→研修者の授業公開への参加

### Do

#### ■英語指導力向上事業

##### 《いわき地区における、小・中・高等学校が連携した研究》

- ・いわき市立中央台東小学校：パフォーマンステストコンテンツの活用、デジタル端末活用の実践、CAN-DOリストを活用した実践
- ・いわき市立中央台南中学校：外部試験の活用、CAN-DOリストの作成、パフォーマンステスト及びデジタル端末を用いた言語活動の研究
- ・福島県立いわき光洋高等学校：外部試験の活用・分析、パフォーマンステストの実践と研究、学校全体の取組の実践
- ・学習指導要領の目標でつなぐ、小中高連携したCAN-DOリストの作成に向け、研究協力校全体で、作成における考え方を共有した。

#### ■授業公開及び支援体制

- ・運営指導委員会（年2回）：情報共有及び協議を行い、外部有識者によりCAN-DOリスト作成に係る講義、指導助言を受けた。
- ・各校、本事業への指導助言：外部有識者を招聘
- ・各校での授業公開：感染症拡大防止の観点から、オンラインによる配信を行った。

### Check

#### ■英語教育実施状況調査（令和3年度調査）

- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標について
  - 中学校：設定 88.8%、公表 22.3%、達成状況の把握 53.0%
  - 高等学校：設定 100%、公表 29.0%、達成状況の把握 39.3%
- ・授業中に生徒が英語を使う割合
  - 中学校 65.5%、高等学校 39.3%
- ・パフォーマンステストの実施状況
  - スピーキングテスト・ライティングテスト両方実施
  - 中学校：84.3%
  - 高等学校：26.5%
- ・小中高連携の実施状況：56.3%
  - 中高連携の実施状況：11.7%

### Action

#### ■継続した小中高等学校での連携した研究（令和3年度～令和5年度）

パフォーマンステストコンテンツや外部試験の継続した活用により、経年変化を含めた客観的な分析や検証を行い、より深い研究を期待できる。

#### ■CAN-DOリストを活用した授業改善と評価の更なる推進

- ・他の研修と連携させ、周知・普及を図る。特に、悉皆研修の活用。
- ・CAN-DOリストの提出や共有について検討する。
- ・HPでの普及の仕方について策を講じる。

### 成果の普及

- 研修協力校が作成した指導案、学習到達目標  
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/edu/eigoshidouyoku.html>
- 小中高連携英語・英語指導力向上について  
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/edu/gimukyoiku65.html>

## 課題

- コミュニケーションに前向きに取り組む力
- 対話を継続する力
- アルファベットの読み書き
- 既習知識の範囲で、自分の気持ちや考えを伝えるために思考・判断・表現する力

## 具体的な取組と工夫

■CAN-DOリストの機能をもたせた振り返りカードを各単元で作成し、目標の共有を行ったり目標に立ち返って反省を書かせたりし、児童の主体的な学習を促した。

■単元末の言語活動に取り組ませる際は、ルーブリックを用いて評価基準を明示し、パフォーマンスの様子をタブレット端末を用いて蓄積し、評価やその後の指導に役立てた。



10月15日(金)小中英語パートナーシップ事業及び英語指導力向上事業授業公開事前授業研究会



10月26日(火)小中英語パートナーシップ事業及び英語指導力向上事業授業公開の様子

## 成果

■外国語教育推進リーダーによるCAN-DOリストの設定と活用についての講習会を実施し、校内における周知と普及を図ることができた。

■目的、場面、状況のある言語活動を軸として指導を行うことができた。

■一人一台端末の有効な活用法について各学年・教科で実践を重ね、共有を図ることができた。

5年CAN-DOリストの一例

## 課題及び改善案

■外国語教育推進リーダーが担当した授業の実践内容及び成果や課題について校内で共有し、学級担任による外国語指導の充実を図っていききたい。

■CAN-DOリストを活用した実践研究を進め、中学校と連携し、内容や形式のつながりをもたせたりリストの設定を行いたい。

■パフォーマンステストコンテンツの効果的な活用の在り方を模索していききたい。

## 課題

- 自己開示しながらコミュニケーションを図ろうとする態度
- 音声と文字を一致させ、語句を書く力

## 具体的な取組と工夫

- CAN-DOリストを作成し、指導と評価の一体化を図る。
- パフォーマンステストを実施 (Speaking, Writing) し、その評価にルーブリック評価を用いる。
- 英語科だけではなく、学年・学校全体で協力してこの事業に取り組む。
- 授業公開を行い、外部有識者より指導助言をいただくことで、自校の課題解決について学びを深める。



11月16日(火)小中英語パートナーシップ事業及び英語指導力向上事業授業公開の様子

## 成果

- 3学年では、全単元において、単元毎の学習計画表を兼ねたCAN-DOリストを作成し、指導と評価の一体化を図ってきた。新型コロナウイルス感染症に伴う休校や様々な変更がある中でも、生徒たちはCAN-DOリストを活用した主体的な学習を行い、自律した学習者へと成長を遂げる様子も見られた。年度末のアンケートによると、CAN-DOリストが主体的な学びにつながったと感じている生徒が8割を超えた。
- パフォーマンステストにおいては、ルーブリックを用いた評価基準を明示することで、生徒たちがより良い発表をしようと心がける様子が見られた。また、その内容には、生徒自身に関する多くの内容が多くみられるようになった。一方、感染リスクの問題で、対面での確認ができないときにも、GIGA端末を用いて録画し、その学びの足跡を蓄積してきた。

## 課題及び改善案

- 来年度は、今年度の実践を踏まえ、実践内容および成果や課題について校内全体で共有し、英語科だけでなく学校全体として指導と評価の一体化についてさらに取り組んでいきたい。
- 生徒が、英語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせることができるような場面設定の工夫にも力を入れていきたい。

## 課題

大学進学希望者が多いが、最重要科目である英語について、模試や外部試験等の成績は全国平均を下回っている。語彙力をはじめ、4技能をバランスよく育成していくための方策を検討して実施し、改善していく必要がある。

## 具体的な取組と工夫

- 語彙力と構文力の定着に向けて、それぞれ週1回ずつ(合計2回)の単語テスト・英語構文テストを行う。発音したり、読んで書いて覚えたり、またスマートフォンのアプリを利用したりするなど、五感をフルに使って覚え、テストに合格しようと努力している生徒が多く見られる。
- スピーキング・テスト(1・2年生全員)・・・本校ALTの協力を得て、簡単な日常会話の後、あらかじめ印刷された質問項目を渡され、その内容についてやり取りをする。質問に答えるだけでなく、ALTにも質問する場面もあり、より即興的な会話力の養成にもつながっている。
- シークレットジャーナル(1年生全員)・・・お互いの名前を明かさずに進めていく英語による交換日記である。最初は書く内容にも苦労していたが、慣れるにつれて、書く内容や話題も増えていき、自然と英作文力も育まれていく。クラス替え時にお互いの名前を明かす。楽しみながら英語に親しみ、英語で「書くこと」についての抵抗感も徐々になくなってきた。
- レシテーションコンテスト(英語暗唱大会)(1年次)・・・あらかじめ選んだ4～5種類の教科書または有名人のスピーチ(一部分)を暗唱して発表するというもの。友人同士で何度も練習し、動画(Google Classroomで配信)のお手本を真似して真剣に練習する姿が見られた。
- メッセージコンテスト(2年次)・・・自分の伝えたいことについて、自分のオリジナルメッセージを作成する。友人同士でメッセージを読み合い、意見を交わしながらより良いものへと仕上げていった。最終的にプレゼン能力の向上にも寄与することができた。

## 成果

- 上記のような取り組みを継続することで、生徒たちは英語でのアウトプットに少しずつ慣れてきた。また1つの活動が、4技能の能力向上に波及効果(Writing→Speaking、Reading→Listeningなど)が見られるので今後も継続したい。
- 1、2年生は今夏英検IBAを受験したが、希望者は英検を学校で申し込みを取りまとめ、英語担当教員が希望者を対象に、筆記試験対策講座や英作文の添削、1次試験合格者に対しては2次試験の面接指導を行っている。受験を希望する生徒も増加しており、意欲的に取り組んでいる。
- ①2021年度7月実施の英検IBAの結果より(1、2年生全員対象で実施)
  - ・2年生・英検IBA CSEスコア 団体平均総合 1772 ・CEFRレベル → A2相当
    - ・英検級レベル → 「英検準2級」合格レベル
    - ・各技能別平均スコア Reading 460 / Listening 451 / Writing 449 / Speaking 407
  - ・1年生・英検IBAスコア CSEスコア 団体平均総合 1717 ・CEFRレベル → A2相当
    - ・英検級レベル → 「英検3級」合格レベル
    - ・各技能別平均スコア Reading 442 / Listening 441 / Writing 441 / Speaking 390
- ②2021年度 英語検定合格状況(2021年度第2回学校申込分まで) 2級→11名、準2級→35名、3級→1名 (※その他個人で申し込みを行い、合格した生徒も複数名いる。)

## 課題及び改善案

- Readingに関しては、普段から英語を読む量が不足しており、長文を読み慣れていないので、英文に触れる機会を多くする。
- Listeningに苦手意識を持つ生徒が多く、今後も演習を継続し、繰り返し聞いて耳を慣れさせたい。スマートフォンで音声やスクリプトを確認できる問題集等を活用し、自学自習でも取り組ませる。
- 英語で書くこと・話すことへの抵抗は少なく、今後はaccuracy(正確さ)のレベルを上げ、英文量とのバランスを取って上達できるように留意する。
- 単語を覚えても忘れてしまう生徒も多い。語彙力の定着に向けて今後も継続して指導していく。
- 本校は1年次・2年次ともに約200人在籍しており、パフォーマンステストの実施時期や回数、内容や評価方法などについては今後検討していく必要がある。